



中里介山著

大菩薩峠

大菩薩峠刊行會

昭和二十八年一月十五日 印刷
昭和二十八年一月二十日 発行



(乱丁、落丁はお取替いたします)

大菩薩峠 (第十六卷)

定価 三百八十円

送料 五〇円

著作権者 中里幸作

発行者 中里幸作

東京都品川区南品川五ノ十三

印刷者 森高繁雄

東京都千代田区神田錦町三丁目十三番地

大菩薩峠刊行会

発行所 株式会社 彩光社

電話 神田 二二三六四番
振替 東京 一九三九七六番

富士高速印刷株式会社印行

大
菩
薩
峠

第十六卷

目次

恐山の巻(前)……………五

恐山の巻(後)……………三六

題

裝

口

字

畫

繪

道

橫

著

重

山

大

信

教

觀

者

編纂責任

梁 寺
取 島
三 枉
義 史

三十七 恐山の巻（前）

田山白雲は北上川きたがみがはの渡頭に立つて渡舟の出るのを待ち兼ねてゐる。

舟の出發を待ち侘びるものは田山白雲一人ではなく、土農工商が一人二人と渡頭へ集まつて引かかる、こちらの岸もさうだから向ふの岸も同様に、土農工商がせき留められて舟を待つ人の數は増すばかりです。

田山白雲は焦れつたがりながら、渡頭に近い高さ三メートルばかりの小丘の上で、遠眼鏡はるかめを眼鏡めんくの上から離さず、マドロスの逃げ込んだ追波おひなの本流の方を頻りに注視してゐましたが、そのうちに向ふ岸の渡頭に集まつて舟を待ち侘びる土農工商の群が、急に動搖をはじめたやうな模様ようようが見えます。同時にその舟待ちの群の中から、轉がり出したやうに躍り出して來た一箇の人物があることを認めて、興味きうみの遠眼鏡はるかめをその方に轉じました。

その人物は、すでに人混みの背後せうろで身仕度をととのへたと見えて身體は裸で頭の上へ物を載せ、人を押し分けて前へ進んだと見ると、いきなりざんぶと川の中へ飛び込んで泳ぎはじめたものですから、

「奥州にも氣の短かい奴がある！」

と、田山白雲が思はず此方で舌を捲きました。

「奥州にも氣の短かい奴がある！」と、田山白雲が思はず舌を捲いたのは、奥州人はすべて氣の長いものと前提を定めてかゝつたわけでは無く、こゝで渡舟の徹底的スローモー振りに呆れ返つた反動から、ツイさう呼んで見たまでのことで、實際、今、川の中へ飛び込んだ眼前（びんぜん）その人物の舉動を見ると、その氣配だけで、確かに氣の短かい男であるべき證據は歴々たるものであります。かくばかり悠々（いづく）、閑々（かんかん）たる渡舟の船頭のスローモトぶりに堪忍がなり難く、堪忍がなり難いと共に、その爆發した疳癬（かんせん）を直線的に決行するだけの盲動力を持つた男であるといふことだけは、白雲の眼と頭でハッキリと受取ることが出来ました。

この大菩薩峠作中の人物では、宇治山田の米友といふ人物が、やはり同様の堪忍なり難い疳癬を持つてゐて直接行動をやることに馴れてゐる——それは田山白雲とも一面の識はあるのだが、あの男が今この場へ飛び出して來よう筈はない。

右の裸男は、最初のうちは、こちらを當面（まへとも）に川を横に泳いで來るのですから、よくわかりませんでしたけれど、やゝ深い處へ來ると、身を斜にして拔手を切り出したものですから、その時はじめてわかつたのは、頭の上に自分の著てゐた衣類を丸めて帶で腮まで縛りつけたのはいゝが、その頭にのせた衣類の真中を貫いて横に一本、長くてさうして黒いものが線を引いてゐる。

「はゝあ、差してゐるな」

と、田山白雲が再び遠眼鏡を取り上げました。

差してゐるな！ といつたのは、一本か二本差してゐるといふ意味ですが、一本差すことは旅の百姓町人と雖も道中を限り許されてゐることであり、それにも長さに限度がある。あの裸者の頭へ戴せたのは普通平民に向つては制限以上に長いから、少くとも士分に屬するものだらうと思はれるのだが、その一本の刃の長さが長過ぎるのに比例して、他の一本の脇差の所在がわからないう、あの頭上の衣類の中に隠されてゐるのか、さうでなければ、これは一本だけ特に長いのを伊達に差す遊俠無頼のともがらでもあるのか。

二

田山白雲が、まだその邊に疑問を持ちながら、多大の好奇心を以てながめてゐると、右の男の泳ぎつふりが痛快で、たしかにこの頃はやる水府流を行つてゐるやうだ、深い處はあんなにして抜手を切り、中邊の處は乳あたりまで浸して悠々と横行し、淺瀬はしやん／＼と飛沫を切り、かくて河を三分の一あたりまで突破して來た時に、後ろから可なりの狼狽と怒罵とを含んだ叫び聲が起りました。

「おーい、何と行くでア、戻つて來もせやい、てんことない、渡場を素通りしてはいけねえでば、川破りの罪になるべちやあ、川破りの罪はお關所破りの罪と同じだべや、戻つて來もせやあ」

右の通り、ハッキリ聞えるわけではないが、向ふ岸で聲を洩らしての怒罵號叫は、渡場を守る處の船頭共がかうもいつて噪いでゐることに間違ひはないのです。

つまり、この裸男の直接行動は、渡場といふものゝ掟と、船頭といふものゝ職業と、その存在とを無視してかゝつた御法破りに類してゐるから、その反逆者を反省さすべく、船頭殿がその職權の上から聲を洩らして呼び戻してゐるに相違ないのですが、川原の中の短氣者は、今さらそれに取り合ふ位なら最初から、かういふ行動には出なかつたでせう。そこで、一旦は踏み留まつて振り返つて見たけれども、忽ちクルリと背を向けて、北上川の川破りの續演をつゞけました。

そこで、當然、警告を無視された向ふ岸の船頭が怒號と共に地團駄を踏み出したのは無理もないが、同時に、こちら側の岸に知つてゐる船頭共も黙つてはゐないのが當然であります。

「やれそれと、のぶとい奴ちや、渡場をまち渡りするは御法度ごはつとなんぞで、何たるワザワグこつたべえ、只ちや濟まねえべ、お關所破りと同罪なんぞで、早うでんぐり返りげんな、素直にでんぐり返つて舟へ乗つて渡つて來てかんせ！ 無茶あしねえものだべなア」

そこで、この川原の中の裸男は兩岸から船頭の怒號の機關銃を浴びせかけられたやうな立場になりましたが、一向立ちすくみもしないで豫定の行動をとつてゐるのです。

かうなつて見ると田山白雲も、成る程、あの短氣者の舉動は一應痛快には似てゐるけれども、理由としては船頭の方に十分の根據が無いではない。

緩慢は緩慢として、スローモーはスローモーとして、それは責めてよろしいが、緩慢であるが故にスローモーであるが故に、渡船の存在してゐるところを身を以て直接行動をとつて宜しいといふ理由にはなるまい。

「こゝは一應船頭のいひ分を立てゝ、立ち戻つた方がよからう、さうして置いて、彼等の怠慢ぶりを取つちめてやる時には我等も相當の義憤を以て應援する」

と、いふやうな氣持にまで田山白雲も緩和されてゐるけれども、當面の裸男は一向ひるむ容子も見えず、大手を振つて堂々と川渡りを決行して來る舉動が、かなり大膽不敵なものであつて、見る人に好奇以上の恐怖と警戒とを與へずには置きませんでした。

あゝして白晝堂々と川破りを決行するからには、捨身でかゝつてゐるのだ、だから何を仕出かすかわかつたものではない——といふ恐怖心が、すべての人の頭を襲ひました。

さうしてゐるうちに、あちらの岸の渡頭から法螺の貝の音が高らかに響き出しましたのです。

三

この際、法螺の貝の音には田山白雲も、多少脅かされざるを得ませんでした。相當喧噪な人間の雑音は、かういふ際だからやむを得ないにしても、この中へ非常時用の器樂が一つ加はらうとまでは思ひ及ばなかつたことでした。

向ふ岸で法螺の貝を吹き出すとやがて此方でも、いつの間にか、田山白雲のつい足許から同じ貝の音がさまざまに響き出しました。法螺の貝の音が聞え出すと共にあちらの畑や、こちらの木蔭や、川にもやつてゐた舟の底なんぞから、一人、二人、三人、四人、續々と人間が首を出して来て、いづれもかなり不穩な面つきをしながら、各々、兩岸の法螺の鳴つてゐる根據を直指して集まり寄るのは非常召集の合圖を聞いた屯田兵のやうです。

「これは、存外、事が重大になりさうだわい」

田山白雲は、自分の身の上に何か相當の危難が降りかゝりでもするかやうに、川の中の強情者の行動を改めて篤と見据ゑて見たが事態がしかく物々しくなりつゝあるに拘らず、事實は却つて簡單明瞭なものに過ぎないといふことを直覺して、却つて安心した氣持になります。

不安の目的物たる存在が、現在眼の前にゐるのですから、問題としては複雑した事情といふものは更に無いのです。萬一、これが夜分であるとか、あれがまた川を縦に走り出した日には、川上へ行つても、川下へ下つても際限が無いのですけれども、川を横切つてさうしてこちらを向いて、白晝たつた一人でやつて來るのですから、その取扱ひは極めて簡單明瞭といはなければなりません。言葉を換へていつて見ると、向ふから追ひ落した獲物を、こちらに網を張つて待つてゐると、獲物それ自身が、その網にかゝりに來るやうな方向を取つて進んで來るのですから、進退の節は極めて明かなもので、却つて兩岸の狼狽ぶりが可笑しいほどのものです。

かくして右の法螺の人物は無事にこちらの岸に到着してしまひました。法螺の貝の下に集まつた連中は直ちに川原へ駆けつけて、怖々とそれを遠巻きにして取り詰めて行くあんばいで、頓には取り押へようとはしません。

「寒いことさえ、凍えてうつ死んぢあうべ——この寒い水ん中をなあ」

時は初秋とはいへ、北地は寒い。あゝして一圖に水へは飛び込んで來たものゝ、漸く岸へ辿り着いた時分には、こゝで一番焚火でもして身を温めてやらぬことには、慄へ上つてものゝ用には立つまい。

と、内々藁火の用意まで心がけて待ち構へてゐると、岸へ上つた右の法螺男は、そこで頭上の衣類を取り下すと共に、その中から手拭やうのものを引張り出して、ゴシ／＼と身體を拭ひ出した容子を見ると、別段慄へても凍えてもゐないやうです。

それから衣類を解きにかゝつて一著に及びました。帯も極めて無難作に引き締めて、その次に袴を穿きにかゝりました。袴を穿き出した時に、取り詰めに行つた法螺の貝の手勢が、また少しばかり動揺して、

「あ、袴かみしもを着てゐやがるぞ！」

袴ではない、袴だけです。その袴とても彼等が見てこそ袴だが、田山白雲あたりが見たのではあんまり感心した袴ではないのです。編目のところは更にわからない、地質の點も不明なのです

が、一見してわかるのは、その行丈ゆきだけの極めて短かいといふことだけです。

さて、この短かい袴をつけてから、次に長い刀を取り上げて腰に差しました。

四

その刀の長いこと——袴が短かつただけに、特に刀の長いのが目立つのでもあらうが、刀そのものを獨立させて見ても、たしかに世の常のものよりは長い。それが、この場合殊更に長く見えるのは短かい袴が引立役をつとめてゐるばかりではない、今まで人品骨柄じんぴんがらのことはいひなかつたが、本來この男の人の身の丈が普通人よりはずつと低くして小さかつたのです。即ち短軀たんく倭小わせうの人物でありました。

田山白雲は、曾て何かの時の戯れに一寸丹心と書くべきを「一寸短身三尺劍」といふ戲畫を描いて極めて倭軀わいく短身の壯士に、圖抜けて長い刀を差させた一枚繪を描いて平山行藏に見せたことがある。

その一枚繪を思ひ出して、思はず微笑しないわけには行きませんでした。本來は、突然かういふ微笑だけでは濟まされない。まづ取り敢へず吹き出してしまつたかも知れないのですが、今日のは最初の出が緊張してゐた上に、鳴物入の凄味まで加はつて此處へ來てゐるのですから、たと若干の失策を餘儀なくされただけで、尙一心に事の成行きを見守つてをりました。

長い刀は差し終つたが、脇差に至つては、その以前に手早く差し込んでしまつたのか、或ひはまだ差してゐないのか、その邊がわからないうちに、右の人物は鐵扇様のものを手に持つて、太鼻緒の下駄を足に突かけて、河原の石をガランゴロンと踏み分け、兩肩を聳^{そび}やかして、さつさと逃げ隠れも悪びれもせず、此方へ向つて瀾^{くわ}歩して來るのであります。

白雲は最早やこの男の人品骨格から、衣類持ものまでも見るのに遠眼鏡を要しません。頭こそ元服はしてゐるが、年齢はまだ若い——恐らく十七八歳を出でまいと見られる若者でした。袴を穿き鐵扇を持つてゐる。長い刀、それは最初遠目に見たところと更に違ひはないが、問題の脇差は遂に見當らないといふことに結着しました。

つまりこの男の腰には、長い刀の一本だけ横はつてゐて、さうして他の差添^{さしぞ}といふものは何も無いことを知つて見ると、どうも變則な武裝だと思はずにはをられません。

脇差はどうしたのだ。

差し忘れたのか、本來差して來なかつたのか、それとも、只今の乗切りで川の中へ取り落しでもしたのか。

田山白雲が餘計な心配までしてやつてゐる時分に、法螺の貝の手勢が、眞黒くなつて早くも右の小兵の長刀の男を取り圍んでしまひました。本來小さい身體なのでから、雜然たる多勢に取り圍まれては、忽ち姿を吞まれてしまふのは是非もないことで、多勢の中に吞まれてしまふと、田